

# 石川県におけるニホンカモシカの分布域の拡大

水野昭憲 石川県白山自然保護センター

## DISTRIBUTION OF JAPANESE SEROW IN ISHIKAWA PREFECTURE

Akinori Mizuno, Hakusan Nature Conservation Center, Isikawa

石川県のニホンカモシカ（以下、カモシカと言う）の分布域については、1981年までの状況がまとめられ（水野ら、1982）、分布域は加賀地方の9市町村、942km<sup>2</sup>の範囲であるとしていた。それ以降も、新しい地域での目撃情報などがあり、生息域が拡大していると思われる。

1982年2月には、石川県内の33,109haを含み、岐阜県・福井県・富山県にまたがる区域、53,662haが、文化庁により白山カモシカ保護地域に設定された。保護地域の設定に伴って、文化庁の指導と補助があり、昭和60・61年度（1985-1987年）に、白山山系をもつ4県の教育委員会によって、白山カモシカ保護地域特別調査が実施された。県境を越え動物の地域個体群単位で調査をし、関係4県が合同でとりまとめたことは画期的なことであった（富山・石川・福井・岐阜県教育委員会、1987）。その調査では、保護地域とその周辺に限って詳細な調査が行われたが、広域の分布状況については残された課題であった。

今回のまとめは、1982年の石川県におけるカモシカ分布域のまとめ（以後、「前回調査」という）以降の目撃情報や滅失記録などに併せ、周辺部の補足調査により、石川県のカモシカの現在の分布域を明らかにしようとしたものである。なお、この調査は、石川県教育委員会文化課の実施している、白山カモシカ保護地域通常調査の一環で実施したものである。

### 調査方法

白山自然保護センターに寄せられた情報、昭和60・61年度の白山カモシカ保護地域特別調査、昭和62年度（1987年）以来継続されている白山カモシカ保護地域通常調査により収集されたカモシカの目撃情報などをメッシュ図にした。また、分布域の周縁を確認するために、1989年2月から3月にかけて、分布域の周辺部に存在する集落を踏査し、住民にカモシカの分布限界を訪ねることで分布の外周を確定した。

前回調査では、分布情報を国土地理院発行2万5千分の1地形図を縦横20等分したメッシュ（国土数値情報の2分の1地域メッシュ）で整理したが、今回は、文化庁の指導によるカモシカ保護地域通常調査のマニュアルに合わせ、5万分の1地形図を縦横20等分した3次メッシュ（いわゆる基準地域メッシュ）を使用した。なお、この地方における3次メッシュの大きさは、南北924.5m、東西1117.25~1126.75mで、面積は、1.033~1.042km<sup>2</sup>であるので、平均して1.038km<sup>2</sup>とした。

前回同様に、カモシカの目撃を確認したメッシュに加えて、地形・植生・人間活動の影響、カモシカ分布の連続性などを考慮して、明らかにカモシカが分布していると思われるところも分布域と推定した。また、確認されたメッシュの間が3区画以上離れていない区画は、その環境をみて分布域に加えた。さらに、白山山頂部を含む亜高山帯より高標高の地域は、寒冷と長い積雪期間のため、冬期に

カモシカはみられず、春から夏にだけ希に移動してくるところである。前回調査では、亜高山帯より上を季節的分布域としていたが、今回のまとめでは特に区別することなく、分布域の一部とした。

県境部のメッシュについては、国土数値情報で「石川県」(17)と記入されている4分の1地域メッシュを含む基準地域メッシュを県境とした。

ここで確認地点としたのは、目撃者、目撃地点及び少なくとも年月まで記録のある情報に限った。どこそこの山や谷にはカモシカがいる、といった情報については、分布域推定の参考とした。

### 結 果

今回のまとめで、石川県のカモシカの分布域は、金沢市・鶴来町・河内村・鳥越村・吉野谷村・尾口村・白峰村・小松市・山中町・加賀市の10市町村となった。加賀市は、前回調査では記録がなくなく、この約8年間の間に新しく分布を広げたところである。(図1)

過去の分布メッシュは、すべて現在も分布している地域であると仮定した。1981年以降にカモシカの分布地域内での大規模な自然環境の変化といえば、尾口村から白峰村にかけての手取川ダムの湛水、吉野谷村中宮温泉スキー場、河内村のセイモアスキー場の建設などがある。しかし、それらのいずれの地区でも、開発によって、カモシカが消えたという話はなく、かえって人目につく機会が多くなっているといわれている。

前回調査以降、現在までに大きく分布を拡大した区域は、山中町から加賀市にかけての刈安山一帯、小松市の鞍掛山から那谷町にかけて、小松市と鳥越村境の火燈山一帯、金沢市内では伏見川・内川の中流域などである。

金沢市の医王山北部では、前回調査で津幡町方向へ分布が広がることを予想していたが、山系が連続しているにも係わらず、大きな拡大はみられていない。この地域には国道304号線と北陸自動車道が走っていて、生息環境の連続性をある程度遮断していると考えられる。

表1 石川県の市町村別カモシカ分布域の変化

市町村	面積 km <sup>2</sup>	1982 分布域 km <sup>2</sup>	1989 メッシュ数	分布域 km <sup>2</sup>	市町村面積に対 する分布面積比 %
金沢市	468.1	186.1	212.5	220.6	47.1
鶴来町	35.4	7.3	13.5	14.0	39.6
河内村	74.6	66.4	70.5	73.2	98.1
鳥越村	74.6	11.2	42	43.6	58.4
吉野谷村	142.6	125.6	135	140.1	98.3
尾口村	136.8	108.7	127	131.8	96.4
白峰村	222.2	213.0	210	218.0	98.1
小松市	374.7	133.6	156.5	162.4	43.4
山中町	154.6	90.0	116.5	120.9	78.2
加賀市	152.0	0	13	13.5	8.9
計		942		1,138	

市町村別の面積を算出するに当たり、メッシュ数に平均メッシュ面積1.038km<sup>2</sup>を乗じた。境界線上のメッシュは、平均して半分のみ面積とみた。

前回調査の分布図を、基準地域メッシュに読みかえて今回の分布図と比較すると、新たに分布地域となったのは、121メッシュである。単純にメッシュの大きさで見ると126km<sup>2</sup>広がったことになる。

分布域の面積は1,138km<sup>2</sup>となる(表1)。これは、石川県全域4,198km<sup>2</sup>の27.1%、加賀地方と呼ばれる金沢市以南の17市町村2,017km<sup>2</sup>の56.4%の区域となる。また、この地方の林野面積1,367km<sup>2</sup>の83.2%にな

り、前回調査の68.9%から14.3ポイント増えた。

なお、前回の調査では、2分の1地域メッシュを使用していたので、今回の基準地域メッシュへの読み替えに伴い、メッシュの増加と面積の増加が一致しない部分が生じている。また、約1kmの基準地域メッシュでは、小さい集落などでカモシカが移動等にも使っていない区域もメッシュ内に含まれ

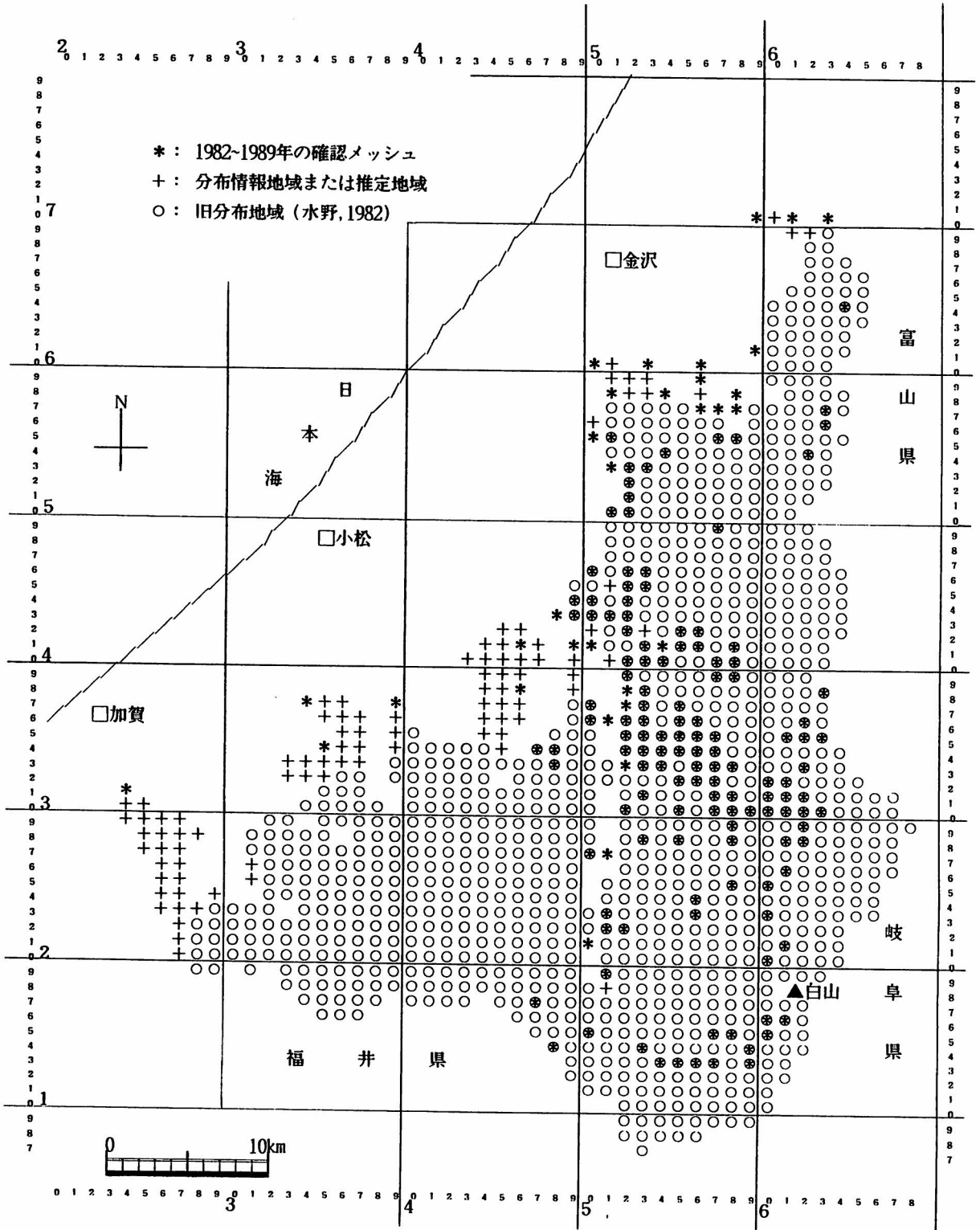


図1 石川県のニホンカモシカ分布域 (1989年)

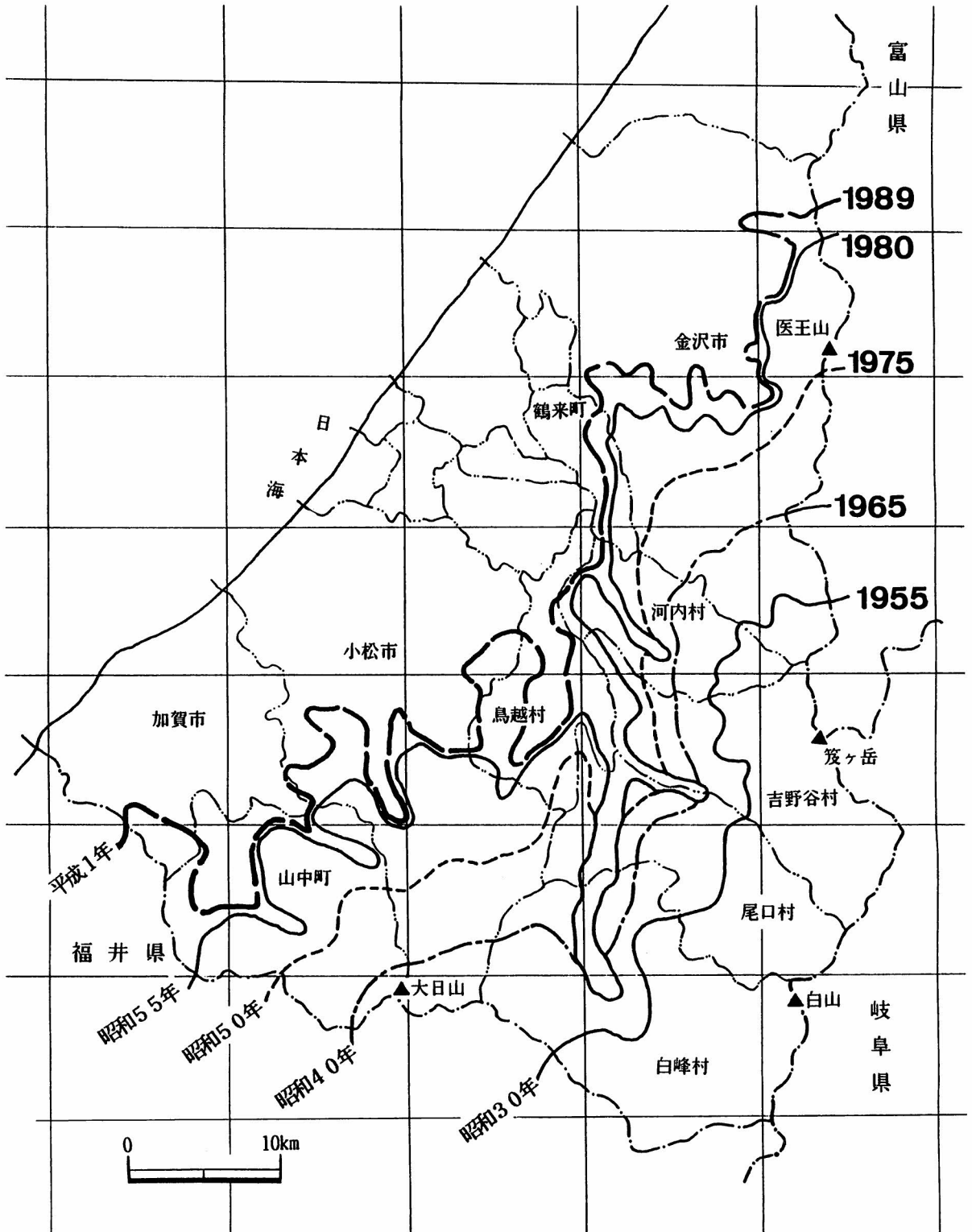


図2 石川県のカモシカ分布域の拡大

ている。

## 考 察

ニホンカモシカが1955年に特別天然記念物に指定されたときには、石川県では白山の山奥深く、猟師もほとんど入ることがない地形の急峻なところに少しだけいるものとされていた。その後の10年間隔で追跡すると、分布域は着実に低山に向かって広がっていた（水野ら、1982）。

現在では、カモシカの分布は白山山系のミズナラブナクラス域植生の地域のほぼ全域に広がっていると見える。市町村面積に対する分布メッシュの面積でみても、河内村・吉野谷村・尾口村・白峰村で集落と農耕地を除く全域に分布するようになった。

1980年までの分布域の変化に今回の分布域を追記すると図2のようになる。過去の急速な分布域の広がり比べると、拡大速度は遅くなっているといえる。カモシカの分布域が加賀地方の林野面積の83.2%にも達しているように、カモシカにとって好適な森林環境の広がりの縁近くまで分布が広がってきた結果、拡大速度がやや遅くなってきたものと考えられる。

動物の分布域が拡大するとき、個体数の増加にともない周辺部へ広がっているのか、環境の変化などによって分布域が移動したり、中央部が低密度になったりしていないかを判断する必要がある。前回の調査で高密度分布域としていた、吉野谷村・白峰村・尾口村の山地では、ブナオ山にみられるように、分布密度の変化はほとんどなく、林業関係者等の声も、むしろ多くなっているという人が多い。従って、加賀平野方向への分布の広がり、個体群全体の移動ではなく、地域全体としては個体数が増加しながら、周辺へ広がりつつあるものと考えられる。

加賀市・山中町・小松市・鶴来町では、カモシカの分布域の前線は、多くの場所で森林地帯の縁まで近くなっている。将来、分布域の広がりが続くとすれば、金沢市の医王山からから北方の宝達山系にかけて、いつどの様に拡大していくのが興味あるところである。今後とも、分布の拡大にともない、加賀地方の畑作物や口能登地方のアテの植林などへの被害発生についても注意をしながら、加賀平野南部の周辺山地や医王山北部などで、分布域変化の追跡を続ける必要がある。

## 謝 辞

本報告の資料として、石川県白山自然保護センターへ多くの方から寄せられた様々な情報を使用させていただいた。石川県教育委員会から委嘱されたカモシカ調査員の昭和62・63年度報告も利用させていただいた。調査員は、下家智見・家智彦・田中稔・広瀬和彦・中村久夫・宮本茂人・斎藤幸次・渡部昭夫・織田愛士・久司敏磨・長岡次郎・山内芳憲・山岸祐一の各氏である。また、沖吉直久・堀川隆司両氏（金沢大学ワンダーフォーゲル部）には、周辺の聞き取り調査に協力をいただいた。これらの方々には厚くお礼申し上げますとともに、今後とも各種情報を寄せていただけるようお願い申し上げます。

## 文 献

水野昭憲・上馬康生・茨木友男（1982）石川県におけるニホンカモシカの分布域及び生息頭数の推定。石川県白山自然保護センター研究報告第8集，59-72。

富山・石川・福井・岐阜県教育委員会（1987）白山カモシカ保護地域特別調査報告書，pp.116。

### Summary

Distribution area of Japanese serow (*Capricornis crispus* TEMMINCK) in Ishikawa Prefecture were surveyed. According to information from local residents, the distribution area was found to spread in the range of Mt. Hakusan, Mt. Iwo and Mt. Dainichi. The area, estimated at 1,138km<sup>2</sup>, consists 56.4% of the southern part of the prefecture.

The distribution area has extended about 200km<sup>2</sup> since 1980 when the last survey on the distribution and population of Japanese serow in the same area were reported (Mizuno et. al. 1982). The extension speed was slower than before because the distribution area has already expand near to the edge of the better forest habitat for serow.